



ねっどわーく



H24. 06. 21

No.18

■6年2組の授業から学んだこと

宮坂先生、陸上、たて割り班活動、またまた6年主任としてお忙しい中、貴重な授業を提案いただきありがとうございます。同学年で同じ悩みを持ちながらの授業研究だったので、個人的に学ぶべき点がとても多い授業でした。

①困り感、課題解決へのモチベーションの重要性ということ

事後研でも述べましたが、6年生として、たて割り班活動（主として清掃ですが）において、非常に良いタイミングでの授業でした。ほとんどの児童が、困り感をもって臨んだ授業、非常に価値が高かったと思います。小グループでの話し合い活動の在り方については、事後研で話し合われた通りだと思います。しかし、個人的には、こうした悩みを吐き出し、それを共有化するということは、自分を振り返ってみるとなかなかできていなかった部分でもあります。とすると「6年生だから、仕方ないっだなあ」とか「6年生だからそれは当たり前だべす」といったことになりがちでした。

児童理解の根本の部分で「そうか〜。大変だよね。どうしたらいいべね。」といったスタンス、再確認しました。

②日常の授業が、学級活動の授業に反映されるということ

教務の高橋圭子先生とも話題になったのですが、授業、当たり前運営(?)されていましたよね。これって、とてもすごいことだと思うんです。で、その当たり前は、宮坂先生の日常の授業の反映なのでしょう。子どもたちに任せる部分の多い授業を数多くなさっているから、自分たちで話し合うことができる。「習うより慣れろ」的部分だと思います。みなさん、子どもたちに期待したい話し合い活動の姿をイメージして、他教科の授業を仕組んでいきましょう。(例えば、いつも45分のうち7分は任せる、口出ししない等。)ここは日常の授業改善とつながる、大切な部分ではないでしょうか。

③「教えた(授業をした)」→「わかった、できた」ではないということ

＝行きつ戻りつ、スパイラルの重要性

これは宮坂先生からお聞きした話ですが、授業後のたて割り班活動で、A君の班が「男女別に昼食」をとっていたそうです。「あれ、昨日のめあてでは…」と声をかけたところ、「あ、んだっけ。」となったそうです。どの教科でもそうですが、とすると私たちは、「一度教えた(授業をした)から子どもたちはわかった」という感覚になりがちです。カテキョーのフレーズではありませんが、ていねいにていねいに、くり返しくり返し、の意識が必要なのでしょう。また、机上のめあてではなくて、こうして「為すことによって学ぶ」ことのできる部分も特別活動の良さなのでしょうね。

④リーダーシップとフォロアーシップの相互作用ということ(お互いの、他者理解)

昨日、東海林先生が4年生の子どもたちに聞いたそうです。「6年生どうだった。」そしたら「準備にどれくらいかかったんだろう。大変だったんだろうな。」という答えが返ってきたそうです。授業から学んだこととはちょっとずれますが、このツッコミって、すごく大きいのではないのでしょうか。他者理解という言葉がありますが、大事にしたいです。